～新潟から持続可能な世界を目指そう！～

JICA海外協力隊とSDGs

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

ジャイカ JICA

JICA海外協力隊とSDGs

SDGsの達成に挑み続けるJICA海外協力隊

開発途上国で、現地の様々な課題解決に取り組むJICA　海外協力隊。活動分野は9分野、190職種以上と多岐にわたり、
どの業種も持続可能な開発目標（SDGs）の達成に欠かせないものです。そして　協力隊での経験は、帰国後もそれぞれの仕事を通して社会に還元されています。

What's JICA海外協力隊？

～JICA海外協力隊ってなんだろう？～

JICA海外協力隊は、開発途上国で現地の人々と共に生活し、同じ目線で開発途上国の国づくりに貢献する活動を行なっています。

JICA（独立行政法人国際協力機構）は開発途上国からの要請（ニーズ）に基づき、それに見合った技術・知識・経験を持ち、「開発途上国の人々のためにそれらを活かしたい」という想いを持つ方をJICA海外協力隊として派遣しています。
任期は原則2年間。これまでに98カ国に5万人をこえる隊員を派遣してきました。帰国後は、日本や世界で協力隊経験を活かして活躍しています。

JICA海外協力隊3つの主な目的

1　開発途上国の経済・社会の発展、復興への寄与
日本が持つ技術や経験を伝え、途上国の人々に役立ててもらいます。

2　異文化社会における相互理解の深化と共生
深化する相互理解と共生の営みにより持続可能な開発の実現を目指していきます。

3　協力隊経験の社会還元
本事業への参加を通じて身に付けた知識や経験を日本や世界の発展に役立てることが期待されています。

JICA海外協力隊経験者の強み

JICA海外協力隊経験者は、採用企業・団体の皆様から次のような点が優れていると評価されています。

◎グローバルな視野
先進国と途上国との両方を経験することで世界を多角的に捉え、派遣された国だけでなく、日本も世界全体の中での一国として捉える視野を持っている。

◎創意工夫・企画力
前例のないこと、これまでできなかったことを自ら企画し、状況に合わせて導入する能力を備えている。

◎語学力
英語、スペイン語、フランス語、ポルトガル語、中国語、アラビア語、ベンガル語、インドネシア語、タガログ語など、JICA海外協力隊が活動で使用した様々な言語により日常的コミュニケーションができる能力を持っている。

◎粘り強さ・コミュニケーション力・交渉力
周囲の理解を勝ち取るために焦らず、慌てず、諦めずの姿勢を持ち、取り組む。

◎トラブルに動じない強さと柔軟性
想定していなかった事態に、冷静沈着に対応することができる。

JICA海外 協力隊の活動

活動分野と職種

計画・行政
国・地域づくりに関わるシゴト
●コミュニティ開発
●コンピュータ技術
●防災・災害対策 など

農林 水産
食べ物や自然 に関わるシゴト
●野菜栽培
●家畜飼育
●土壌肥料 など

鉱工業
ものづくりに関わるシゴト
●自動車整備
●建設機械
●食品加工 など

人的資源
教育やスポーツなど人を育てるシゴト
●小学校教育
●各スポーツ職種
●体育 など

保険・医療
いのちに寄り添うシゴト
●看護師
●感染症・エイズ対策
●理学療法士 など

社会福祉
福祉に関わるシゴト
●ソーシャルワーカー
●障害児・者支援
●高齢者介護 など

商業・観光
マーケティング や観光に関わるシゴト
●観光
●経営管理 など

公共・公益事業
生活サービスに関わるシゴト
●土木
●廃棄物処理
●建築 など

エネルギー
エネルギーに関わるシゴト
●電力
●再生可能・省エネルギー など

×

2030年までに、世界を変革 していくための17の目標

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

1 貧困をなくそう
2 飢餓をゼロに
3 すべての人に健康と福祉を
4 質の高い教育をみんなに
5 ジェンダー平等を実現しよう
6 安全な水とトイレを世界中に
7 エネルギーをみんなに そしてクリーンに
8 働きがいも経済成長も
9 産業と技術革新の基盤をつくろう
10 人や国の不平等をなくそう
11 住み続けられるまちづくりを
12 つくる責任 つかう責任
13 気候変動に具体的な対策を
14 海の豊かさを守ろう
15 陸の豊かさも守ろう
16 平和と公正をすべての人に
17 パートナーシップで目標を達成しよう

What's SDGs？

～SDGsってなんだろう？～

SDGsとは、"Sustainable Development Goals"（持続可能な開発目標）の略です。

2015年9月 国連本部で、日本を含む193の加盟国が、「みんながずっと地球に住み続けられるようにするためには」「みんなにとって幸せな未来をつくるためには」どうしたらいいかを話し合い、採択された世界共通の目標です。SDGsは開発途上国のみならず、先進国が抱える課題も網羅し、国やNGOなどだけではなく、民間企業や市民ひとりひとりの取り組みが求められています。

私たちの行動は、SDGsと繋がっている

私たちの身近な行動は、世界の課題と様々な形で繋がっています。例えば、フェアトレードの商品を選んで買い物することは、開発途上国の人々の働き方を変えるだけでなく、貧困をなくすことや、児童労働を防ぎ、子どもたちに教育を受けさせることにも繋がります。

1 貧困をなくそう
4 質の高い教育をみんなに
8 働きがいも経済成長も

SDGs達成を目指して

JICA海外協力隊員は派遣国で、そして帰国後は日本で、どのようにSDGsの達成に貢献しているのでしょうか?
ここからは、現在新潟で活躍している10名のJICA海外協力隊経験者のエピソードをご紹介します。

CONTENTS

01・北 愛子さん【マラウイ／青少年活動】
02・佐竹 直子さん【フィリピン／保育士】
03・渡部 悟さん【ミクロネシア連邦／土木設計】【マレーシア／河川整備】
04・渡辺 勝美さん【イエメン／システムエンジニア】
05・石垣 稔さん【フィリピン／水産物加工】【チュニジア／商品開発(水産品)】【フィジー／水産物加工】【ガイアナ／水産物加工】
06・外村 悠さん【マラウイ／感染症・エイズ対策】
07・河内 毅さん【グアテマラ／森林経営、村落開発普及員】
08・穂積 翔太さん【ドミニカ共和国／コミュニティ開発】
09・宮 隆彰さん【エクアドル／環境教育】
10・涌井 和美さん【ガーナ／服飾】【エジプト／手工芸】【ジャマイカ／手工芸】

01

AIKO KITA

北 愛子さん

マラウイ
(2014年度／青少年活動)

教員研修にて指導を行なう様子。

サステナブルな農村を目指して試行錯誤しています

私が派遣されたのは、音楽の指導方法が分からず、授業を行なうことが困難な教員が多数いた地域。まずは、教員に授業を行なうための知識や技術を身につけてもらうことが大切だと考え、教員研修を開催し、楽譜の読み方や楽器の奏法を一緒に学びました。参加者のモチベーションが上がらず、研修を断念しようと思ったこともありましたが、参加者に意見を聞きながら運営方法を改善し、修了証を用意することで意欲が向上。30名の教員に研修を修了してもらうことができました。協力隊経験を通して「正解が分からない時でも試行錯誤したり、人に相談することで物事を前に進める姿勢」が身につきました。現在は新潟大学佐渡自然共生科学センターに所属し、生まれ故郷である佐渡島で里山農業の保全に携わっています。過疎化・高齢化の急速な進行による担い手不足など課題は多岐にわたりますが、SDGs達成に関わる大切なミッション。試行錯誤しながらサステナブルな農村の未来像を模索しています。

農地の情報をICTツールに入力。テクノロジーの活用で課題解決をはかります。

02

NAOKO SATAKE

佐竹 直子さん

フィリピン
(1992年度／保育士)

上）地域食堂でボランティアさんたちと食事の準備。「ハイ！チーズ！」。 右）フィリピンにて、少数山岳民族の子どもたちに折り紙を教えているところ。

「人と繋がること」が社会全体を豊かにすると学びました

NPOの活動「居場所づくり事業」健康お茶会で骨盤体操の講師をしている様子。

協力隊時代は、火山噴火の被災地で約100カ所の保育所の環境整備や衛生指導、保育内容の充実と保育者養成を行なったほか、村落開発活動にも取り組みました。自給自足を促す生活支援（養鶏・火山灰土でも育つ農作物栽培など）や新たな産業（紙漉き・手工芸・加工品など）のスタートアップ支援など、生活の基盤を整えることで子育てしやすい環境づくりに取り組みました。協力隊という多職種のネットワークがあったからこそできた活動だと思います。帰国後は、地元長岡で子育てしやすい社会の実現に向けて、4人の子育てをしながら子育てネットワークの構築、多世代多分野多地域多文化の交流の中間支援を続けています。隊員時代に「人と繋がること」が社会全体を豊かにするのだと学びました。中越地震をきっかけに始めた減災啓発・災害支援の活動も継続中です。近年では地域食堂を主宰し、顔の見える関係で社会課題の解決に取り組むなど、今も地域の「草の根の活動」で汗を流しています。

03

SATORU WATABE

渡部 悟さん

ミクロネシア連邦
(1992年度／土木設計)
マレーシア
(2005年度／河川整備)

上）帰国後、2011年洪水の災害復旧で設計した床固工。 右）ミクロネシアの排水樋門設計をした現場にて。

異文化共生を自然との共生に活かしています

高校卒業後、新潟市内の建設コンサルタント会社で10年間、河川関係の設計を経験して、協力隊に参加しました。現地のミクロネシア・チューク州は、小さな島が散在する地域で、離島と本島を結ぶ交通基盤である港と、空港の調査設計が主な仕事でした。帰国後は地元新潟のために働こうと決めていましたが、10年経った頃に「もう一度行ってみたい」「今度は専門の河川分野で協力したい！」と思い立ち、ふたたび協力隊員としてマレーシア・サラワク州の河川局で2年過ごしました。マレーシアでは河川技術者として、ボルネオ島の大陸棚を流れる大河川の河岸侵食問題に取り組み、とても貴重な経験をしました。帰国後も変わらず新潟の河川や海岸設計に関わっています。洪水や波浪といった自然現象と向き合う中で、海外の海や川を見た経験が現場のニーズに合った設計を考えるうえで活きています。仕事に限らず、異文化理解の経験は、新しい問題に直面した際に解決策を導くうえで大きく活かされていると感じます。

マレーシア・サラワク州ラジャン川の河岸侵食調査。

04

KATSUMI WATANABE

渡辺 勝美さん

イエメン
（1992年度／システムエンジニア）

JICAイエメン結核対策プロジェクト調整員（保健所訪問）。

自然エネルギー事業を通じて安全な環境と自立可能な社会を目指します

「おらって にいがた市民エネルギー協議会」の太陽光発電施設で草刈り＆点検の後に撮影（後列向かって一番右）。

私の派遣先は、中東のイエメン。国立サナア大学医学部図書館で職員にPCソフトの使い方を教えながら、図書検索システムを作る活動をしました。途中で内戦が起きて派遣が中止になってしまい、検索システムは完成に至りませんでしたが、途上国の人々の生活を肌で感じることができました。中東の人々が日本に対して抱いている印象や感情を知ることができ、自分がいかに先進国側からしか世界を見ていなかったかということに気付かされました。帰国後は、JICAのプロジェクト調整員や在外事務所の企画調査員として※MDGsに関わる業務に従事しました。その後、家族の病気や介護でJICAの仕事が続けられなくなり、11年前から日本でパートの仕事をしています。現在は「おらって にいがた市民エネルギー協議会」の一員として活動し、SDGsの目標7「エネルギーをみんなに そしてクリーンに」の課題に取り組んでいます。太陽光発電を中心に、クリーンなエネルギーを地産地消するエネルギー自治を目指しています。

※2000年に採択された「ミレニアム開発目標（Millennium Development Goals）」の略。

05

MINORU ISHIGAKI

石垣 稔さん

フィリピン（1992年度／水産物加工）
チュニジア（2006年度／商品開発（水産品））
フィジー（2011年度、2014年度／水産物加工）
ガイアナ（2016年度／水産物加工）

上）フィジーの南太平洋大学（USP）で漁民を対象に行なった加工講習の様子。
右）ガイアナの漁業協同組合で魚の鮮度比較試験。

地球の食を考え、「安全でおいしい」を届けています

アフリカの飢饉を知り子供達に十分な食事を取ってもらいたいと、大学で栄養学、大学院で食品安全学を学び、新潟市内の食品会社で漬物、惣菜、魚介類加工品の商品開発に従事しました。幸い現職で協力隊に参加することができ、帰国後は海外の経験を会社に還元しました。その後、再び協力活動への意欲が高まり、退職をして4回海外協力隊として活動をしました。現地では食中毒の防止方法、魚の鮮度保持や現地の原料での商品開発をしました。同僚は国連や他国の技術援助を受けていましたが、「初めてのことを色々教えてくれる」と感謝してくれ、やりがいをとても感じました。学生からは「このクラスは家族だね」と言われ、嬉しさで胸が熱くなりました。近年は外国人労働者と一緒に大根の収穫を通して、生産者の努力と苦労を経験しています。「安全でおいしい」を届けることや、農業従事者の高齢化や食糧問題などの「地球の食」を考え、次の海外協力活動の準備をしています。

胎内市にて大根の収穫メンバーとの記念写真。

06

HARUKA HOKAMURA

外村 悠さん

マラウイ
（2015年度／感染症・エイズ対策）

性産業で働く女性たちへ感染症の講話をしている様子。

一緒に活動していたCBOの女性たち。

現地の人々の健やかで豊かな生活を目指して活動しました

サッカー場でHIV・エイズに関する健康講話。

私が派遣されたマラウイは、アフリカ諸国の中でもHIV・エイズの感染率が高い国のひとつ。マラウイにはCommunity Based Organization（以下CBO）という小規模な住民組織があります。HIV・エイズの陽性者を含むCBOの女性たちと共に、ハギレで人形などを製作し、飲食店で販売しました。細かい作業は得意なのか、興味がある女性が自然と集まり、収入向上に貢献することができました。また、マラウイの医療スタッフが村に出向き、5歳未満児の検診や予防接種を行なう際には、母親への健康講話などを実施しました。地域をよく知るスタッフと村々を歩くことで人との繋がりができ、青少年や性産業で働く女性たちへのHIV・エイズや性感染症、性教育などの講話も行なうことができました。帰国後はNGOの現地駐在員として、バングラデシュの難民キャンプで支援活動に従事しました。現地の方々の人柄や文化、習慣を楽しみながら仕事ができたのはマラウイでの経験のおかげです。

07

TAKESHI KAWAUCHI

河内 毅さん

グアテマラ
（2002年度／森林経営）
（2005年度／村落開発普及員）

上）グアテマラの住民と行なったワークショップ。 右）災害支援で被災者の方から話を伺っている時の様子。

住民の主体性を引き出すことが支援者の役割だと気づきました

私は2度にわたり、グアテマラで活動をしました。1回目は森林経営隊員として日本式の炭焼きの導入に関わりました。高品質な炭と、副産物として医薬品や農業資材として利用可能な木酢液の生産により、住民の生活向上を目指しました。また、日本の里山のような施業を行なうことで現地に持続可能な循環モデルを作ることが可能ではないかと考えていました。残念ながら、任期中に循環モデルを作りあげるには至りませんでしたが、日本式の炭焼き技術の移転には貢献出来たと思っています。2回目は村落開発普及員として、地域住民と共に集落の農産物の生産性向上、農民や女性グループの組織化や活動づくりなどに取り組みました。地域の発展を持続させるには、住民のやる気や主体性が大切。それを引き出し、支えることが支援者の役割なのだと気づかされました。帰国後の現在は、地域防災や災害支援の仕事をしています。グアテマラでの経験や学びが今の活動の中でもしっかりと生きていると思います。

グアテマラの地域住民と作った炭窯を使って初めて木炭を作った際の記念写真。

08

SHOTA HOZUMI

穂積 翔太さん

ドミニカ共和国
（2017年度／コミュニティ開発）

テーマは「食と農」。フェアトレードで世界を繋いでいます

フードメッセ新潟2019での様子。

女性グループとのカカオ製品試作会。

大学の農学部で国際開発経済論を専攻し、卒業後は7年間商社に勤務しました。「食と農」の分野で、日本での社会人経験を海外の舞台で活かしたいと思い、JICA海外協力隊に応募。ドミニカ共和国の環境保護NGOの管轄する地域で、カカオ生産農家と共に働きました。2年間の活動では、生産者組織の発足・製品開発・販売能力強化・マーケティング知識の拡充を目標とし、現地の仲間に助けられながら、組織の組合化まで行なうことができました。帰国後も、「食と農」をテーマに日本と中南米を繋ぐ仕事がしたいと思い、縁あってコスタリカやドミニカ共和国のカカオ・チョコレートを輸入販売するRomero Tradeで働いています。フェアトレード取引で生産者から適正な価格で買い取り、その商品で日本のお客様に価値を提供するという仕事ができているのは、日本での社会人経験で培ったコミュニケーション能力や調整能力が協力隊での経験を経たことで、より国際的な能力に成長したからだと感じています。

10

KAZUMI WAKUI

涌井 和美さん

ガーナ（2009年度／服飾）
エジプト（2015年度／手工芸）
ジャマイカ（2017年度／手工芸）

ガーナにて、リサイクル素材を使ったバッグを製作。

ジャマイカにて、着物・浴衣についての講話を行なっているところ。

「ない」ところから「なにか」を作り出す発想力が養われました

エジプトにて、ラクダの編みぐるみを製作している様子。

協力隊に参加したきっかけは、ザンビアを訪れた際にNGOの方や協力隊員達と出会い、活動を見たり聞いたりしたこと。ガーナでは職業訓練校において、服飾の基礎知識や新しいアイデアの創出などに携わりました。貧しい生活を送る生徒が大多数のため、生地を用意することも困難な状態。余った布を用いて小物を作り、収入向上に繋げました。エジプトでは、3カ所のNGO施設を巡回し、各施設の得意分野を活かした物作りに取り組み、女性グループの収入向上に貢献しました。ジャマイカでは、空港等で販売するお土産品の製作に携わりました。限られた資源を活用して作業することがほとんどの中、「ジャマイカらしい」物作りのアイデア出しと提案を促し、いくつかの試作品を一緒に作りました。3回の協力隊経験で、「ない」ところから「なにか」を作り出す発想力が養われました。帰国後は、サービス業に携わっています。物怖じせず外国人のお客様とのコミュニケーションも取れるようになれたと感じています。

09

TAKAAKI MIYA

宮 隆彰さん

エクアドル
（2014年度／環境教育）

上）街のお掃除マスコットの着ぐるみを着て、環境美化を啓発。 右）高倉式コンポストの作り方の講習を行なっている様子。

協力隊での経験を活かし、安全な水の供給に貢献しています

大学で環境問題について学び、途上国の環境問題に興味を持つようになりました。実際に現場を自分の目で見て、問題解決に貢献したいと考え、協力隊に参加しました。エクアドルでは近隣の小中学校を巡回して生徒に※3Rについての授業を行なったり、生ゴミを分解する高倉式コンポストの作り方を教えたりしました。「言語も文化も全く違う異国。生活するだけで精一杯の状況で自分にできることがあるのか？」と自問自答もしましたが、机に座っているだけでは駄目だと思い、現地で使えるコンポストの作り方を自分で実験し、同僚に教えました。協力隊での活動を通して、とりあえずできることからやってみる「実行力」が培われたと思います。帰国後は現地生活で最も苦労した水問題に関わりたいと思い、総合水事業会社である水ing株式会社に就職して、水処理施設の運転管理を行なっています。初めての分野で戸惑うことも多いですが、協力隊で培った異文化適応力を活かし、安全な水の供給に貢献しています。

ごみのポイ捨て防止の授業を行なっている様子。

※Reduce（減らす）、Reuse（繰り返し使う）、Recycle（再資源化する）の総称で、環境配慮に関するキーワード。

＼ 私たちもJICA海外協力隊×SDGsを応援しています！ ／

新潟県国際交流協会 理事長
中山 輝也さん

新潟県国際交流協会では、北東アジア諸国を中心に地域間の地道な国際交流を行なっています。その取り組みは、SDGsの基本となる地域基盤の安定を目指したものであり、JICA海外協力隊の活動と通じています。ご苦労された協力隊経験者の方々は、国際協力をリードする人材。今後の更なる活躍を期待しています。

長岡市国際交流センター「地球広場」センター長
羽賀 友信さん

SDGsの活動は、まず個人ができることから始め、最後は国家が連携し合って問題解決に望まなければなりません。それには、ローカルな課題をグローバルな視点で共有し、反映する「グローカルな視点」でアクションを起こすことが重要。協力隊員がこの視点を持って活動に貢献することを大いに期待しています。

にいがた青年海外協力隊を育てる会 事務局長
横山 容司郎さん

私たち、にいがた青年海外協力隊を育てる会はJICA海外協力隊を応援しています。開発途上国で2年間貴重な体験をした協力隊経験者の方々が、新潟県で活躍されていることに感謝します。これからも持続可能な社会づくりに貢献し、未来を担う子どもたちの目標となっていただけることを期待しています。

JICA海外協力隊の活動は、派遣中も帰国後も多種多様。
それぞれの経験や強みを活かしながら、SDGs達成に向けた取り組みを行なっています。
SDGsやJICA海外協力隊についてもっと知りたい方は、お気軽にJICA新潟デスクまでお問い合わせください。

世界を元気にした人は新潟も元気に！

JICA海外協力隊

開発途上国で現地の人々と共に生活し、同じ目線で途上国の課題解決に取り組むJICA海外協力隊。
協力隊で培った経験を活かし、新潟で活躍する3名のOB/OG隊員にお話を伺いました。

カレー移動販売
「チャドカン」オーナー
藤村真美子さん
MAMIKO FUJIMURA
大阪府出身。バングラデシュへ派遣され、地域コミュニティの開発に貢献。帰国後、地域おこし協力隊での任期を終え、十日町でバングラデシュカレー店を開業。

アフリカンベーカリーカフェ
「ナミテテ」取締役
工藤 知子さん
TOMOKO KUDO
派遣先のマラウイでは病院検査室の技術移転に尽力。現在は新潟市でパン屋を経営。パンを通じてアフリカの魅力を伝える傍ら、地域の福祉活動にも取り組む。

新潟市ひきこもり相談支援センター
支援コーディネーター
齋藤 勇太さん
YUTA SAITO
青年海外協力隊としてエクアドルで野球指導を行なう。帰国後、ひきこもり経験者などが通う民間学校の勤務を経て現職。新潟にも多様な場を創りたいと奮闘中。

世界を元気にする力。日本への還元

海外協力隊へ参加する動機は何だったんですか？

齋藤・僕はフリースクールで働いていたんですが、生徒との関わりの中で彼らにチャレンジすることを促していたんです。でも、ふと「自分は何かにチャレンジしたことがあるのか？」って思ったんですよね。そこから、「海外で働こう！」と思ったのが動機です。

工藤・東京で検査技師として働いていたんですが、学生の頃から海外で生活したいという思いがあったんです。職場で協力隊OBの方と出会い、その活動内容を知り応募しました。

藤村・私は元々地域おこしに興味があり、将来のキャリアアップに繋がると思い参加しました。

みなさんの動機は様々なんですね。どこの国でどんな活動をしていたんですか？

齋藤・僕の派遣先はエクアドル。大学まで続けていた野球を現地の人に教えていました。

エクアドルの子どもたちに野球の技術指導を行なっている様子。ほか、指導者養成にも貢献した。

工藤・私は、アフリカ・マラウイで病院検査室の技術移転やマネジメントをサポートしていました。

藤村・バングラデシュで、コミュニティ開発に携わっていました。

様々な経験をしたと思いますが、現在の職業や活動にどういきていますか？

藤村・私の暮らす十日町は人口流出が進み、地域のコミュニティが薄れつつあります。そんな中、派遣先で出会った“チャドカン”という、外で談話しながらお茶を飲むという文化を思い出しました。“チャドカン”のような憩いの場を十日町にも作りたいという思いで、バングラデシュカレーのお店「チャドカン」をオープンしました。地域のコミュニティに必要とされる店を目指しています。

バングラデシュカレーの移動販売「チャドカン」。カレーを通して十日町の魅力を発信し、コミュニティの場となることを目指す。

工藤・国際協力や社会的弱者の支援はアフリカだけでなく、新潟でできるということに気付いたんです。そのような方たちを積極的に雇用し、私達の大好きなアフリカの魅力を発信できればと帰国後、同じ海外協力隊で出会ったパン職人の夫と、私の出身地の新潟で「アフリカンベーカリーカフェ ナミテテ」を開業しました。この店を土台に社会貢献したいと思っています。

齋藤・「チャレンジすること」へのハードルが下がりました。チャレンジは誰でも、いつでもできるんだなって。現在はひきこもりに関する相談員をしています。人それぞれの小さなチャレンジを応援できるような、彼らと継続的に関われる場を作りたいです。

海外協力隊で出会った工藤夫妻。「アフリカンベーカリーナミテテ」を土台に、アフリカの魅力や文化を伝える。

最後に読者に向けてメッセージをお願いします

藤村・JICA海外協力隊に興味のある人は気負いせず参加して欲しいです。得るものが必ずあります！

齋藤・今まで見えなかった景色が見えたり、現地での出会いがたくさんあったりと、おもしろい経験になると思います。

工藤・「どう生きたいか」を実現すれば充実した生活に繋がります。その生き方を見つけるきっかけになると思います。人生が変わりますよ！

【問い合わせ先】
JICA海外協力隊HP(https://www.jica.go.jp/volunteer/)
JICA海外協力隊　検索

【JICA新潟デスク】
新潟市中央区万代島5-1 万代島ビル2F 新潟県国際交流協会内
TEL:090-4024-1323　MAIL:jicadpd-desk-niigataken@jica.go.jp

〜気軽に相談できるJICA窓口〜
JICA海外協力隊の応募相談、その他JICA事業
ご利用のご相談など、お気軽にお問い合わせください！

●新潟県の国際協力情報などを発信中！
Facebook:
https://www.facebook.com/JicaNiigataDesk